R-18
エロは大人になってから
FOR ADULT ONLY
I've a sweet tooth♡
アイブ ア スイーツ トゥース
屑コウ | ヒロアキ | しょうのすけ
CKST | BEL-TREE

作：ヒロアキ

ないです
これは本当に
ないです

そんなこと言いながら
着てくれるあずにゃん
素敵！

うぐ…っ！
というよりですね？

私料理作りに
来たんですよ！？

なんでこんな
恥ずかしい格好
しなきゃ
いけないんですか！！

まぁまぁ
あずにゃん
眼福♪
眼福♪

…はぁ
本当に唯先輩
何考えて
るんですか…？

何って…

あずにゃんはさ
なんだと思う？
ん…
あ…
ん…
はぁ…
んぁ…

ちょっ！
ゆ　唯先輩！？

んんっ！

駄目ですって…
んっ…料理…作ってと

いいよ
別に

あっ…

それより…さ
折角こんな格好
してるんだよ？

他にすることが…ね？

えへへー
じゃあ早速…
ギュッ…
……もう
別に今じゃなくても
ご飯食べた後で
いいじゃないですか…
私唯先輩にご飯
作るために
一杯練習して
きたんですよ？
だから！
その…エッ…こほん
そ　そういった事するのは
ご飯食べてからにしてください！
私は逃げませんし
今日はずっと一緒なんですから！
それに…

やっぱり好きな…人に抱かれる時ってもっともっと甘いムードがいいなって…

唐変木な唯先輩に期待しても…いい？

…かわいい

…うん

私のもてる全ての知識を総動員してあずにゃんを悦ばせてみせるよ！

うーん…やっぱりなんかずれてる…唯先輩って

と言うことであま～いムードのために

セクシーな下着にしてみましたー

因みに後ろはTバックでぇーす

……

どうどう？興奮しちゃう？

……

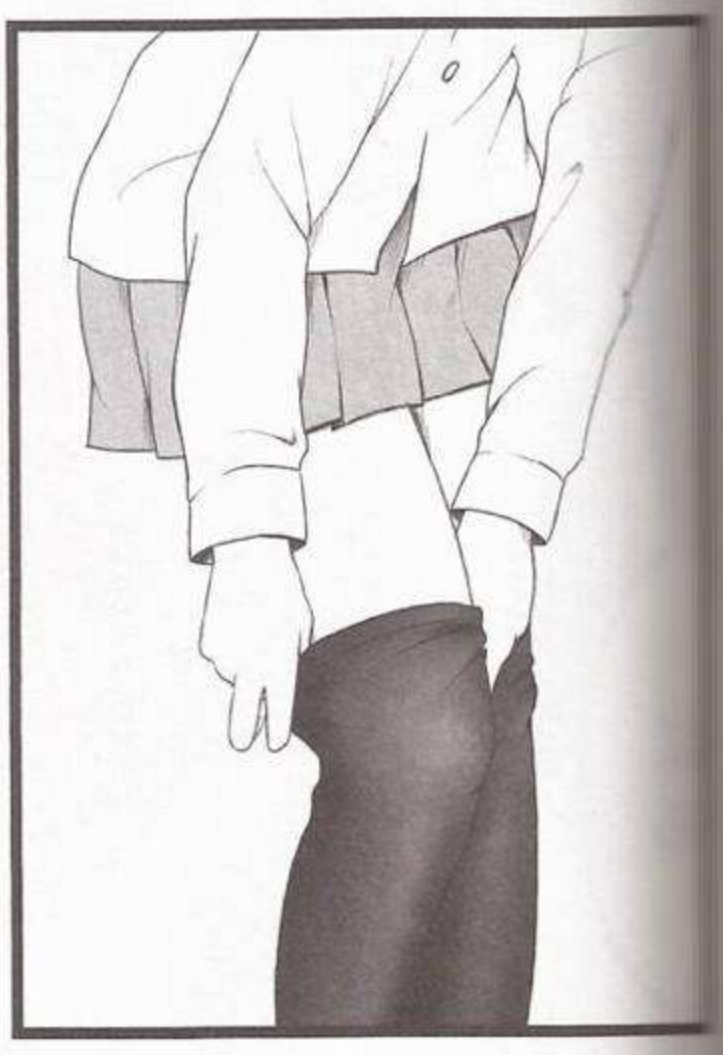
あずにゃん？

わっ あずにゃん！？

結局ムードも何もありませんでした

ばたばたばた

作画：ckst



唯先輩と同じものを

履いたら思わず…

くちゅ♥

…ン

はぁ

はぁ

あずにゃん、
そんなに触ったら…

形分かっちゃうよう

唯先輩のすごく…

は…あっ

ビクン！

ビクッ

ン…

くちゅ

ちゅ

ぐっちゅっ

もっと近く、
もっとよく…

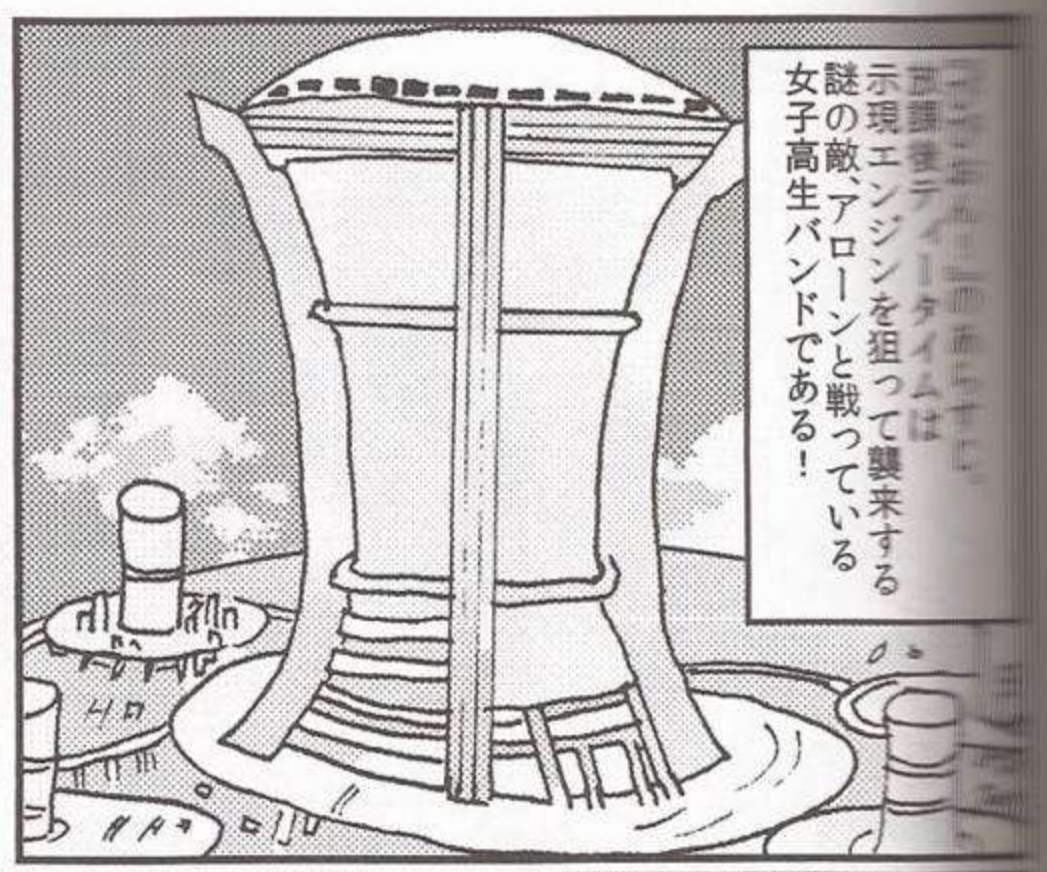
今回は
ここまで

ckstラフ画コーナー

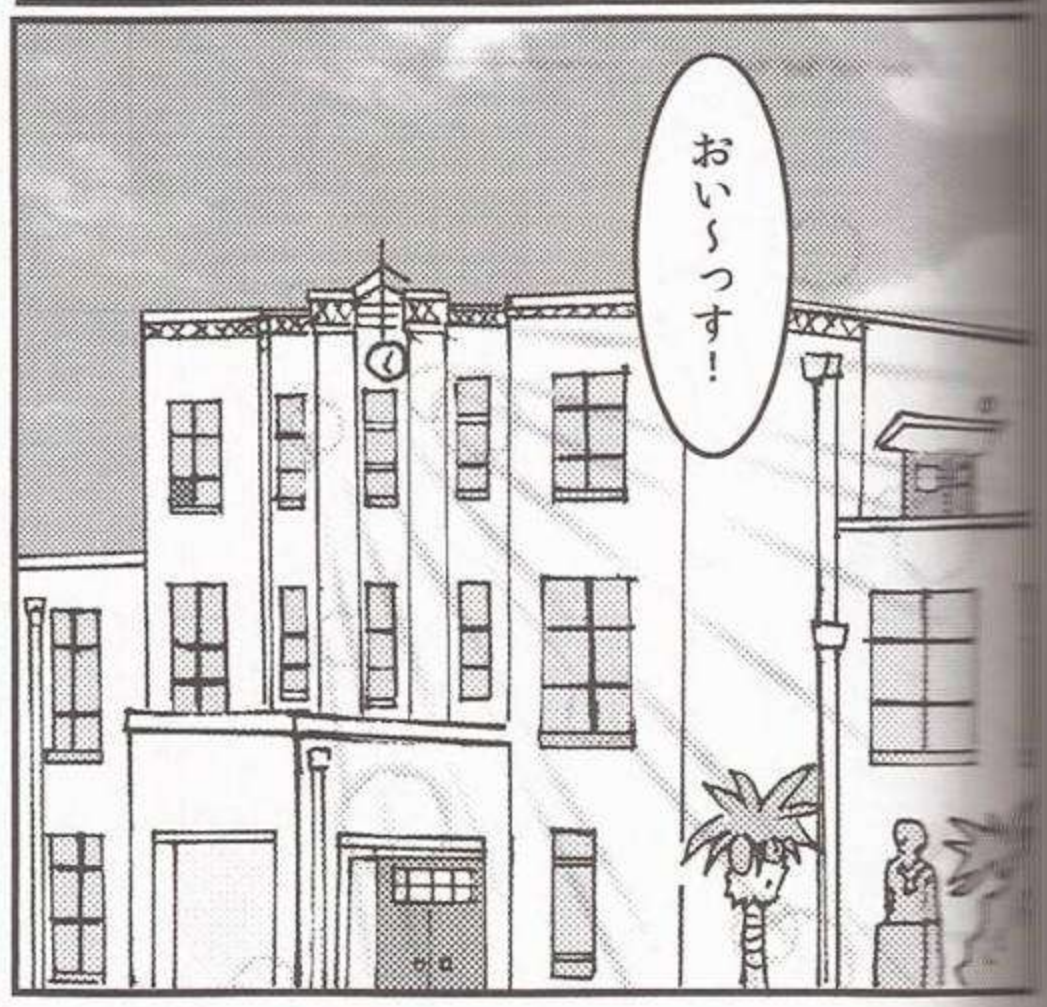
大変申し訳ございません。
ギリギリまで頑張ったのですが、本編間に合いませんでした。
恥ずかしいのですが、過去のラフを公開させていただきますので、ご勘弁ください。

今回出すことの出来なかった
原稿は後日何かしらの機会で
公開できたらと考えております。
その際は、んもぅ布団！blog
などで告知させていただきます

びびおん！
番外編
作・しょうのすけ
いつか元の姿に戻ったら、私もみんなと一緒に…


試験後ティータイムは
示現エンジンを狙って襲来する
謎の敵、アローンと戦っている
女子高生バンドである！

人型アローンを辛くも撃退した
彼女たちは束の間の
安らぎの日々を送っていた…
チーン


おい～っす！

やっほー
ムギちゃん！
今日のお菓子は
何かな～？
るんるん
ギィ～

あら唯ちゃん!!
これから用意する
ところだけど
りっちゃんと澪ちゃん、
梓ちゃんも
たしか今日は
遅れるんだったかしら？
うん、三人とも
掃除とか日直だって～
Royal Madeleine
Madeleine

だから皆そろうまで
練習しておこうかな～って
あら珍しい、
梓ちゃんが聞いたら
泣いて喜ぶわよ～
練習してお腹空かせれば
お菓子ももっと美味しくなるしね！
ふふ、そうね～
せっかくだし私も
ちょっと弾いちゃおうかな

ねぇ、ねぇ、ムギちゃんって
パレットスーツの実験のときに
今の姿になっちゃったんだよね？

そうよ～

最初の実験の時は
ビビッドシステムがまだ安定してなくて…
たまたま近くにあった
ぬいぐるみと身体が
入れ替わっちゃったの

じゃあさ、
今なら成功するんじゃ
ないかな？

えっ？

ふむ…

今ならシステムも
安定してるでしょ？
ムギちゃんも
変身できるかも
しれないよ～！

うーん、
たしかに試してみる
価値はあるかも！

よ～し！

それじゃ早速！
ムギちゃん
オペレーション、
スタート～！

ば
っ！

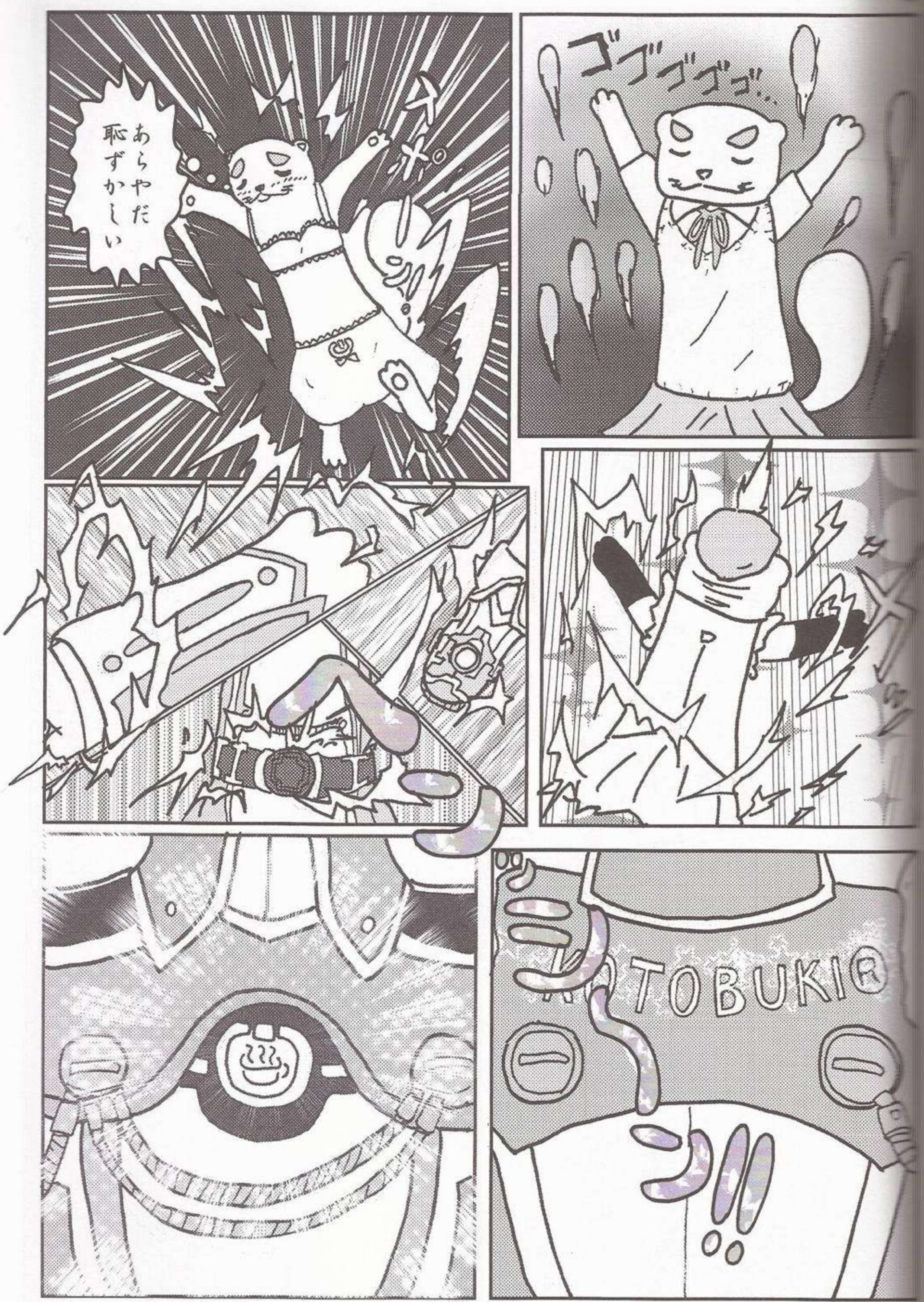
イグニッション！

ぐっ…

テクスチャ～…

オンッ
！！！

ガチャッ！


ゴゴゴゴゴ…
あらやだ恥ずかしい
TOBUKI®

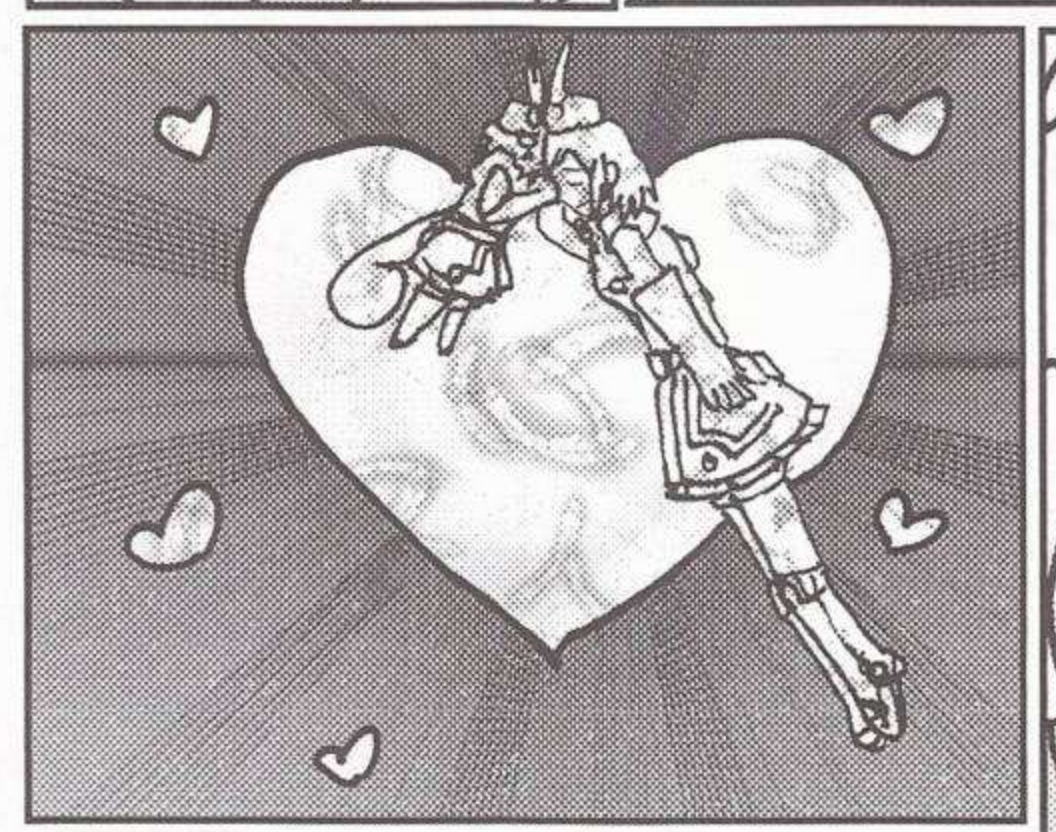
やったわ唯ちゃん！
私もパレットスーツを
装着できたわ～！！
ムギュ
やったねムギちゃん
可愛いよ～～～!!
って、
どうして唯ちゃんも
パレットスーツになってるの!?
それはね
ムギちゃんと
チュージョン
したいからです
ギリッ
ええっ!?
チュ、チュージョンって
ドッキング？
い、いきなりそんなこと
言われても…
それに私となんて…
梓ちゃんに
悪いわ…
いやだわ唯ちゃんったら…
どうして
あずにゃんに悪いの？
もしムギちゃんも一緒に
アローンと戦えるようになったら
嬉しいな～って
そ、そうね…
あと今のムギちゃんと
チュージョンしたら
どんな姿になるのかも
気になるよ～

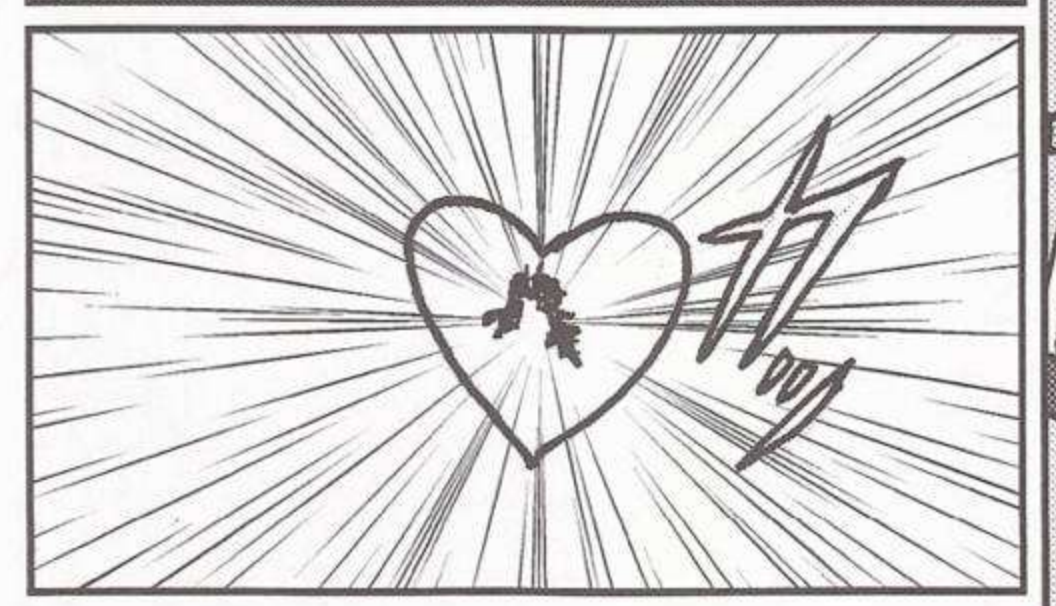
ドッキングも成功すれば
もっと楽にアローンを
倒せるようになるはずだし…
でも、今の私とドッキングしたら
どうなっちゃうのかしら…
こちらも気になるわね！

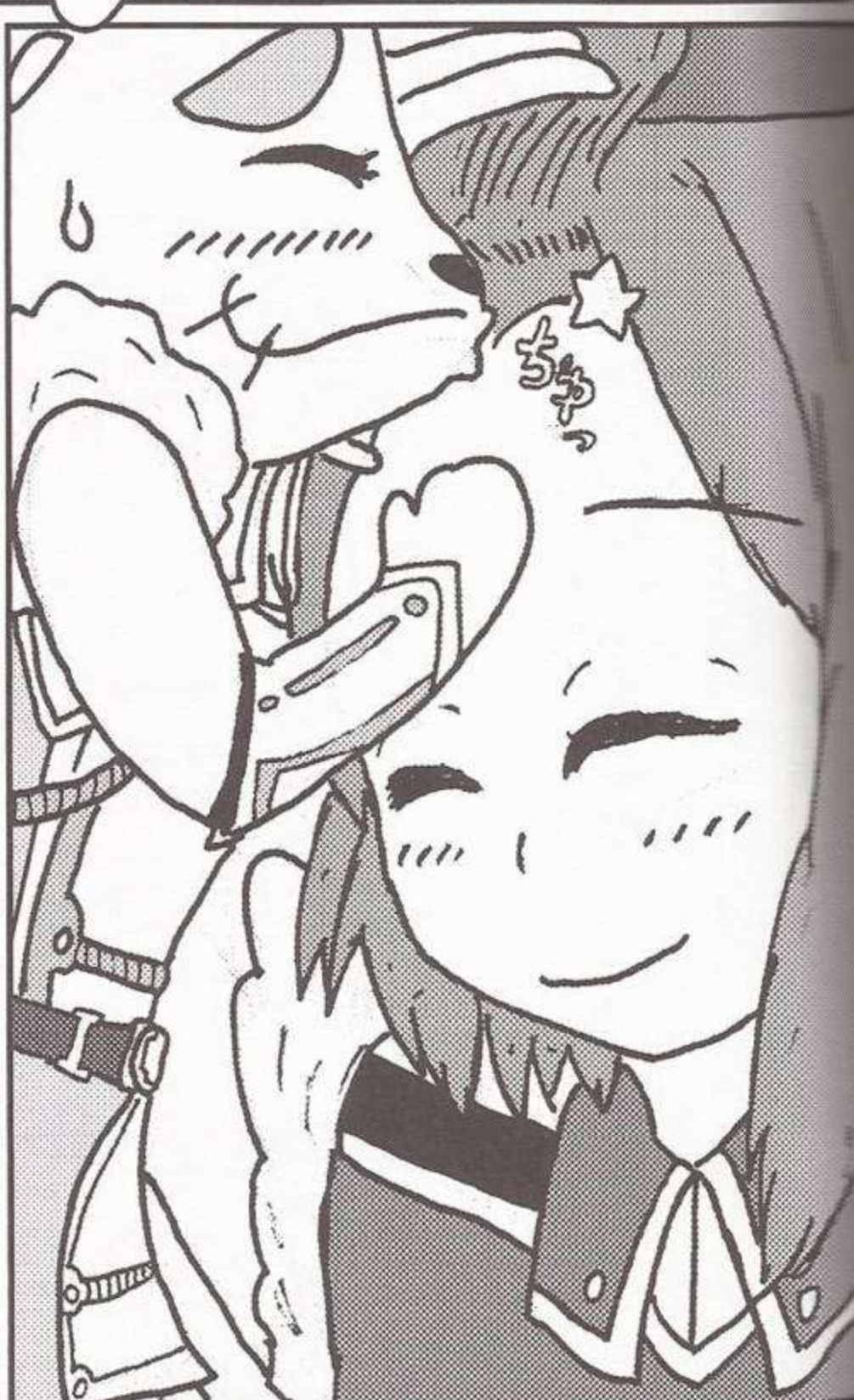
わかったわ唯ちゃん！
ドッキング…
いえチューージョン、
やってみよう！
おお！
それでこそ
ムギちゃんだよ～！

チューはおでこで
いいんだよね？
さあ、どうぞ♪
ゴクリ…
ゆ、唯ちゃん…
いくわよ…！

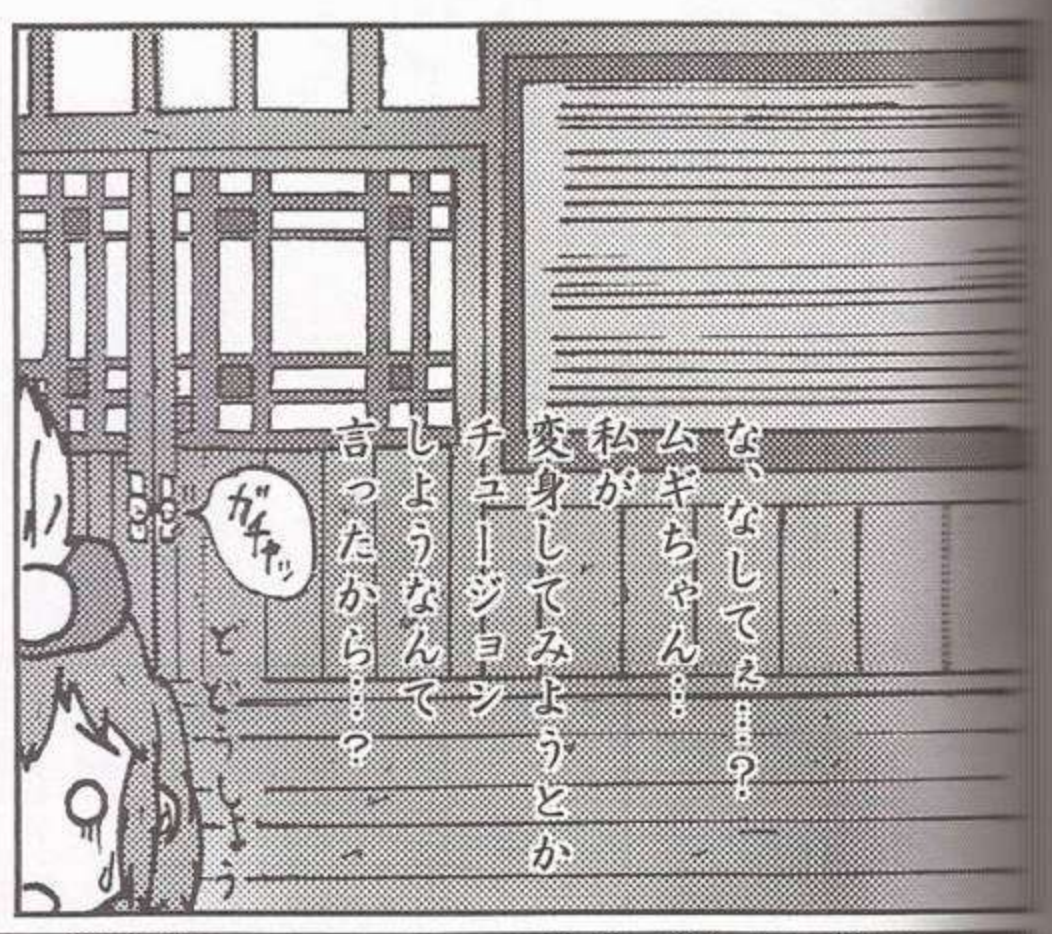
ドキドキ
ア、アローン。
友情出演





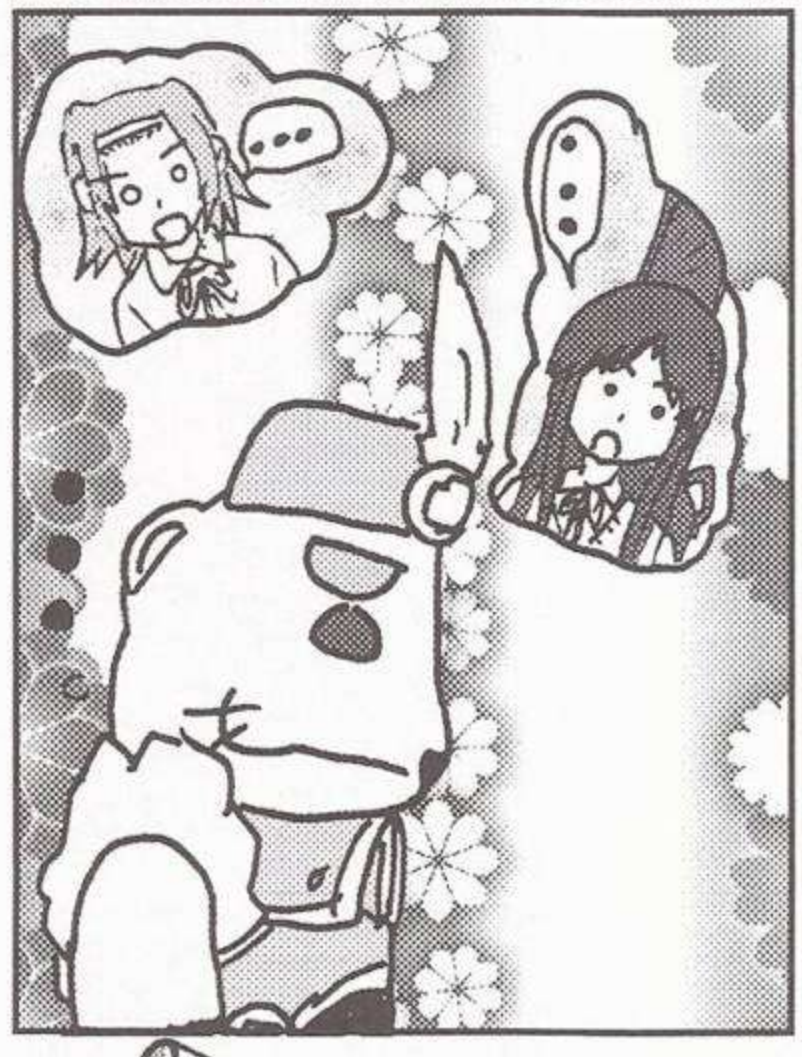

ちゅっ

失敗!!
すぽーん!
わぁぁーっ!?
む、ムギちゃん…?
シ～～～シ…
ちょっと頭打っちゃったや…ムギちゃん大丈夫?
アイテテ…
しっ
しんでる…


な、なしてぇ…？
ムギちゃん…
私が
変身してみようとか
チュージョン
しようなんて
言ったから…？
ガチャッ
どどうしよう

おーす！
さっき演奏してる
音聞こえてきたぞ～！
私らも混ぜて～！
まぁでもその前に
お茶しようぜ～
ムギ～！
ん？
唯、どうして
変身してるんだ？
びくっ

りっちゃん、
澪ちゃん…
どうしよう…
ムギちゃん…
しんじゃった…
はっ？



ゴゴゴゴ
KOTOBUKI
紬
ムギちゃんの身体が保管されている
紬ハウス
示現エンジン頂上
うーん…
LEVEL 9
TSUMUGI
SLEEPING BEAUTY
許可無ク 立チ入リヲ禁ズ
はっ!?
ぱっちっ
がば
これは…たしか私は唯ちゃんと…
そっか、元の姿に戻れたんだわ~!
やった~♪唯ちゃんのおかげね~!
ふもっ

再び部室

お疲れさまでーす

ガチャ

掃除してる時に唯先輩のギター聞こえてきましたよ練習してたんですか？

珍しいですね！

あずにゃ～～ん！ムギちゃんが、ムギちゃんが～！

えっ？あれ？

どうしてパレットスーツに…？

およよ…

実はかくかくしかじか…

私たちも見たわけじゃないんだよ…

これ本当にムギ先輩なんですか？最初からぬいぐるみだったとしか思えませんけど…

コンコンッ

？

ん、なんだ～？

見て見て～！元の姿に戻れたの～♪

スカイハイ！

これでみんなと一緒に空を飛べるわ～♪

ムギちゃ～ん

ムギ先輩っ!?

ムギ～～～～～ッッ！！？

もしも彼女が起きてきたら……

BEL—TREE

「もう、先輩じゃないんだよ～、ないんだよ～ないんだよ～」

そう言いつつ、唯先輩は部室から出て行ってしまいました……一人部室に残された私は何も出来ず、ただ呆然と立ち尽くすだけです。やがて先輩の声も完全に聞こえなくなったころ、視界も白く霞んでいき……気がつくと私はホテルのベッドの上でした。今のは、また同じ夢ですか。これで3度目です。そのたびに胸の奥が少し痛む気がするのはなぜでしょう。

私、中野梓は唯先輩達の卒業旅行になぜか同行する事になり、現在ロンドンに来ています。ロンドンでの宿泊先で私は唯先輩が留年するという同じ夢をなぜか繰り返し見ています。その唯先輩はというと、私と同室で今も隣のベットで寝ています。私はふと気になって唯先輩の方を見て見てみましたが、先輩は夢をみてるのか、なにか寝言を言っているようです。ちょっとその寝言が気になって私はベットから降りて唯先輩の方に近づきました。

「・・ずにゃん、にゃん・・むにゅ」

あれ、ひょっとして私のことでしょうか。唯先輩の夢にも私が出ているのでしょうか。なぜか胸がドキドキしてきました。この高鳴りはどうしたことでしょう。なぜ私は最近唯先輩の事を考えると卒業してしまう事への寂しさとは別になにかモヤっとしたものを感じるのでしょうか。私はどうして何度も唯先輩の夢を見るのでしょうか。もちろん留年は心配ですが、でもそれと同時に私はあの夢になにか温かいものも感じているのです。

気がつくと私は唯先輩の顔に自分の手を伸ばしていました。その手は先輩の頬をそっと撫でています。ぷっくりと膨らんだ頬は柔らかく、とてもすべすべしていて、そのさわり心地良さと共に温もりが私に伝わって来ます。先輩の寝顔、とっても可愛いと思います。何か胸の奥から熱い気持ちがこみ上げてきます。

「ぎ～太～　むちゅ～」

今度はギー太を可愛がっている夢を見ているのか、唯先輩は可愛く唇を突き出しています。いつもギー太ばかりじゃなくって、たまには私を……今ここにいるのはギー太じゃなくって私なんですから……ふと、そんな想いが私の中に沸き上がってきます。ギー太に焼きもちなんてなんてバカらしいと思いつつも、先輩のピンク色のすべすべで柔らかそうな唇を見つめていたら切ない気持ちが込みあげてきて、この人のそばに、もっとそばに居たいという想いが募ってきます。どうして私とこの人は生まれが1年違うのでしょう。

私はそのまま魅せられる様に先輩の顔に自分の顔を近づけて行きました。唯先輩の顔が近づけば近づくほど私の胸は高鳴ります。ドキドキ、ドキドキ。頬が紅潮しているのが自分でも分かります。そして互いの顔が間近まで迫り、私の心臓はもうはちきれそうな程に早く強く鼓動を打っています。私はその鼓動に押される様に目を閉じ、引き寄せられる様に先輩の唇に自分の唇をそっと重ねました……

その瞬間は頭の芯が痺れた感じで、先輩の唇の感触とかは正直よく覚えていません。ただ、ほんのり香る先輩の甘い体臭が気持ち良かった事は微かに覚えています。

自分が何をしているか自覚した瞬間、私は自分で自分が信じられず慌てて唇を引き離しました。そして、一目散に自分のベッドへ逃げ込み、布団を被りました。ね、寝ぼけてるんだ私、いや違う寝ぼけてなんかいない、と二人の私が心の中でいがみ有っています。しかし、そんな事はどうでもいいのです。私は自分の気持ちにはっきりと気がついてしまいました。そして、どうしてあの夢を何度も見るのかも。

唯先輩の留年が心配という気持ちに嘘はありません。先輩方4人とも奇跡的に同じ大学に行けるようになったのですから、4人で大学生活を仲良くおくっていただきたいと本当にそう思います。でもその一方で、もしも唯先輩が留年してしまったら、もう一年先輩と一緒に居られるかもしれないと期待をしている卑しい自分がいるのです。唯先輩ともう一年、二人だけの軽音部、二人だけで一年間過ごせるかもしれないと考えると心臓が早鐘のようにドキドキとして止まらない自分もいるのです。そんな事を考えてはいけません。そもそも、唯先輩があずにゃん好き～というのは先輩、後輩としての好きであって、今の私の様な気持ちを望んでいるわけではない筈です。女の子同士で好きだなんてきっと変に思われるに決まっています。早く寝て今の事はもう忘れてしまおうと私は思いました。

しかし、そう思っても胸のドキドキは収まるはずも無く、寝つける訳もありません。そ

して、私の隣では唯先輩が微かな寝息をたてて寝ているのです。それを意識してしまうと余計に眠れなくなり、胸は高鳴ります。布団の中でモジモジしていた私は、下半身に違和感を感じて、そっと手を伸ばすとそこは濡れていました……

「さっきのキスのとき時だ……」

自分の恥ずかしい部分に触れていた指を引き上げてみると、指と指の間、微かに糸を引いています。

「私ってば、いやらしい娘だ……」

唯先輩が隣に居ると思うと悶々とした気持ちは治まらず、また近づいたりしたら自分が何をするかも分からず、私は自分で自分を慰めるしかありませんでした。

私、そんなんじゃ無いはずなのに……でも、切なさは抑え切れず自然に手は下半身に伸びてしまいます。ショーツの下に手を滑り込ませると、そこはもうヌルリとしており、すじにそって指を這わせるだけで体がビクンとなりそうでした。こんなに感じやすいなんて、私こんな状況なのに……いや、こんな状況だからでしょうか。感じやすい突起を濡れた人差し指でそっとなぞるとえも言えぬ感覚がそこからジクッと沸き上がってきます。

「う、くふぅ」

つい声が漏れてしまいました。気をつけないといけません。それにこのままではショーツをかなり汚してしまいそうで、私はパジャマの下とショーツを布団のなかでもそもそと少し下げました。そして空いているもう一方の手でブラジャーの下の自分の胸を可愛がります。正直、小さな私の胸。でも唯先輩なら可愛いって言ってくれますよね。あずにゃんらしいとも言うかもしれないですね。でも、あずにゃんらしいってなんですか、先輩。私らしいってなんでしょうか。こんな風に貴方を想って自分を慰めているのは私らしいのですか。

この指が唯先輩のものなら……そう思うと余計敏感に私の体は反応してしまい、すでに下半身はかなり濡れてしまっています。大事な部分を隠しているピンクのベールをかき分け、思い切って指をそこに入れてみました。普段はあまり入れないんですが、今日は入れずにはいれませんでした。あまり指も入れたことの無いそこはかなりキツく私の指を締めあげてきます。しかし、中はかなり湿っているため自分の指くらいならそれほどは痛いと事はありませんでした。そして、恐る恐る指を上下に動かすと、なんとも言えぬ感覚がぞわぞわっと私の背中を駆け抜けます。これが気持ちいいって事なのかは正直まだよく分かりません。指から伝わってくる私の中の感触は熱く、吸いつくような感覚はそこに別の生き物がいるような変な感じがします。しかし、そこから伝わってくる感覚は指の動きとシンクロしていて、そこもやはり私の一部なのだと感じさせます。

胸の方の小さな突起も、もうかなり硬くなっており、触る度に普段とは違うゾクゾクする様な感じがして私の脳天を焦がします。薄い胸肉も揉みしだく度に自身の女性を感じ、それが少し嬉しかったりもします。

そんな風に自身を慰め、快楽に耽りながらも、頭の一方では冷めた私がいて冷静に思考を続けています。思えば夏以降、受験に向けて何かとが忙しい先輩たちと私は別行動になる事がしばしばありました。目標に向かって邁進している先輩たちを見ていると、応援しなくっちゃという気持ちと共に、一人取り残された寂しさが有りました。いえ、それだけじゃありません。今なら分かります。私は羨ましかったんのです。唯先輩と一緒に歩んで行ける他の皆さんが・・・律先輩や澪先輩、ムギ先輩の事だって好きなのに、本当に大好きなのに、嫉妬していたんです。私ってなんて愚かなんでしょう。

私は胸を弄っていた手も下に伸ばすと濡れている部分で指を湿らせ、小さな突起を擦り上げました。今まで試した事無いほど強く摘み、戒める様に激しく擦りました。それはちょっと痛い程でしたが、愚かな私にはその位が丁度いいと思いました。しかし、そんな私の気持ちとは裏腹に体はすぐに強い刺激も受け入れてしまい、否応なく私を頂上に向けて押し上げていきます。やがて、大きな快楽の波が押し寄せて、私はそれにあさっりと飲み込まれてしまいました。

「ん、んんーん、んん、ん!」

思わず声が出そうになりそうになったのは抑えましたが、その後は前進の力が抜けた様にぐったりとなってしまい、息も絶え絶えという程になってしまいました。

そのとき、近くでふいに声がしました。

「あずにゃん、どうしたの? 眠れないの? それに息が荒いよ、体調悪いの?」

ビックリしたなんてものではありませんでした。先ほどの気だるさは一瞬で消え、思わずビクンとベットから飛び起きてしまいました。あの勢いで飛び起きて下半身が顕わにならなかったのが奇跡な位でした。

「あqwせdrftgyふじこlp:」

まさしくこんな感じで口から変な言葉が漏れたと思いますが、それすらハッキリとは覚えていません。

「あずにゃん、大丈夫?」

顔から変な汗が出てるのが、自分でも分かります。落ち着け、落ち着け私！落ち着かないと！落ち着こうと思うものの私の気持ちは千々に乱れます。「私そんなんじゃないんです！」というのはつい昨日の私自身の言葉。唯先輩に肘打ちを喰らわせて放った拒絶の言葉です。そんな私が唯先輩を思って自分を慰めていたなんて、もしもばれたら、私は今後どんな顔をして唯先輩に会えばいいのでしょう。

「せ、先輩。大丈夫です！　ちょっと、ちょっと寝苦しかっただけですので」

「本当に大丈夫、顔真っ赤だよ？熱でもあるんじゃない？」

そういうと、先輩はいつなく素早い動きで私に近づき、おでこを私のおでこにくっ付けました。近い！近い！近いです。唯先輩！唯先輩の瞳が間近で私の目を覗き込んでいます。私の心臓は破れそうなくらい早くドキドキといっていて、胸が痛みます。そんな中でも私は先輩のいい匂いが気になりました。先輩の柔らかな前髪が私の額をくすぐる気持ちよさに酔いそうで……ああ、ついに先輩の鼻の頭が私の鼻にくっつきました！

「あずにゃん、やっぱり少し熱い」

そんな近くで喋られたら、吐息を、吐息を感じちゃいます唯先輩。ダメです、今はそんな近くでダメです！唯先輩への気持ちや、お三方へ嫉妬、見られた事へのパニック、恥ずかしさ、色んな事がかき混ぜられて、私の中でどんどん何かの圧力が高くなって行きました。そして、それはついに私自身思いもしなかった黒い濁流となって溢れかえり、ついに心のどこかが決壊してしまいました。私は自分自身で何かをしたいのかもロクに意識せず、ただ衝動のままに、自分が秘めていたもっとも強い衝動のままに動いてしまったのです。

「唯先輩！」

そう叫んで、先輩に飛び掛かった私は体全体で巻き込む様にしながらベッドの上に先輩の体を引きずり上げ、そのまま組み伏しました。そして、そのまま強引に唇を奪ってしまいました。もう一度同じことを再現しろと言われたらできる自信は全くありません。当然ですが、唯先輩も何が起きたか理解できずに目を白黒させています。唇はぎゅっと強く閉じられていて、私はただ乱暴に押し付けているだけで、それは決して口づけなんて呼べるものではありませんでした。

馬乗りになった私は体全体で唯先輩をベットに抑えつけつつ、手は先輩のシャツを乱暴にかき上げました。なぜか唯先輩はブラジャーをしていませんでした……目の前に顕になった嫋やかなそれはピンクの宝石を頂点にして丸くなだらかなスロープを描き、先輩の呼吸とともに上下に軽く動いていました。私は柔らかな、程よい大きさのそれを両手に乱暴に揉みしだきました。小さな私のそれとは比較にならないような柔らかさと量感、手の平にピタっと吸いつく様な感触は私を魅了しました。私はただそれを貪欲に味わうだけで、相手のことなどお構いなしの乱暴さで乳房を弄んだのです。ぷにっとマシュマロみたいな胸の肉がいびつにひしゃげました。指を押し返す弾力が私の背徳感をより一層煽りました。

「あずにゃん、痛い！痛よ！」

こんな事をしたいんじゃない！こんな風に先輩を傷つけたいわけじゃない！心の片隅はそう叫んでいましたが、私の黒い衝動は収まらず、行動は止まりませんでした。

「あずにゃん、あずにゃん！」

私は先輩のそんな声にも耳を貸さずに、一心不乱に身体を貪ろうとし続けました。しかし、次の言葉を聞いた途端、私は自分の耳を疑いました。

「あずにゃん、ごめんね」

その言葉を聞いた途端、さすがに私は動きを止めました。やはり私の行動は先輩を深く傷つけて、怯えのあまり訳も分からず謝っているのに違いありません。私はなんて事をしてしまったのだろう。後悔と自責の念が私を襲いますが、全ては手遅れです。もう以前の様な仲の良い先輩後輩にも戻れないでしょう。私は自ら自分の大切なもの、もっとも大切にしなければいけないものを壊してしまったのです。せめて唯先輩に一言でも謝らなければ。そう思い私はゆっくりと身体を離し、先輩の顔を恐る恐る覗き見ました。

「あずにゃん、ごめんね」

しかし、唯先輩は目には私が思っていた様な怯えの色はなく、本当に、そう本当に心配そうに私を見ていました。どうしてこの人はこんな状況なのに、私にそんな優しい目をむけてくれるのでしょう。私は半ばパニックに陥りながらも唯先輩に問いかけました。

「どうして、どうして、先輩があやまるんですか、酷いことをしてるのは私なのに！」

「だって、あずにゃん泣いているよ？」

はっとして自分の頬に手をやると、そこは確かに濡れていました。

「苦しかったんでしょう。分かってあげられなくってごめんね」

どうして、どうしてこの状況でそんな優しい言葉が出てくるのだろう。どうして、この人は私の言って欲しい言葉を言って欲しいタイミングで言ってくれるのだろう……

唯先輩なのに、いや唯先輩だからですか……

「頼りない先輩でごめんね、でもあずにゃんが悲しいと私も悲しいよ、私もあずにゃんが好きだから」

そう言いながら先輩は体を起こし、やさしく私の頭を引き寄せ、胸に抱えてくれました。私は、そんな唯先輩の優しさがうれしくて、それに比べて矮小な自分が悲しくって、先輩の胸に顔を埋めて、声を上げて泣き始めてしまいました。泣きじゃくながら私は唯先輩に何度も謝りました。唯先輩はそんな私の髪を優しくなでながら、よしよしとか、寂しかったんだねとか噛み締めるように慈しむように言ってくれます。いつか憂が言っていた

「お姉ちゃんってあったかくって気持ちいいよね」

という言葉が思い出されます。憂、私あの言葉の本当の意味が今ようやく分かった気がするよ。唯先輩って本当にあったかくって気持ちいいね……

私は暫くベッドの上でそうやって唯先輩に体を預けて泣き続けていました。やがて、私が少し泣き止んで落ち着いた頃に

「あずにゃん、顔を上げて」

その言葉に従って、顔をあげると先輩はすごく優しい顔で私を見ていました。暗い部屋でもその瞳の輝きは分かります。私が憧れてやまない、いつでも前を見ている瞳です。

「あずにゃん、私、本当にあずにゃんの事好きだよ。あずにゃんは、わたしの事どう思っているの」

「わ、わたしも好きです。そう気がつきました。でも、私にあんな事してしまう私にその資格は……」

「資格ってなに?人を好きになるのにどんな資格が必要なのか私には分からないけど、私はこの2年間あずにゃんを見て来たよ。だからさっきのあずにゃんが本当のあずにゃんじゃ無いって事は分かるよ。だから、もしも私の事が好きなら好きって言ってくれると、私はとても嬉しいよ。女の子同士って変かもしれないけど、私あずにゃんの事は本当にいっぱい、いっぱぁ〜い好きだから」

「唯先輩……」

「梓……」

私は言葉が出ずにじっと唯先輩の顔を見つめていましたが、唯先輩はその顔をゆっくりと私に近づけてきました。そして、先輩の腕が私の頭の後ろに回され、顔ももう間近な距離まで迫ってきます。私もそっと目を閉じてその瞬間を待ちました。

吐息が私の唇にかかり、ちょっと間があって唇と唇が重なりました。先ほどの私が行った暴力的なそれとは違い、優しいキスでした。柔らかい唇同士がムニュっと潰れて、唯先輩の体温がそこから私に伝わって来ます。もう私の心臓のドキドキは収まらず、痛いくらいです。唯先輩の舌が私の唇を優しくなぞっていきます。そして、唇を割って私の中に入ってきました。

「ん!うう!」

驚いて思わずそんな声にならない声を上げてしまいましたが、でも先輩はそんな私に構わず舌を入れて来ました。私もおずおずとそれに応えました。お互いぎこちなく舌と舌を絡めると、私の心臓はもう胸を突き破って出て行きそうなほどドキドキしていました。でもそれはとても暖かい鼓動でした。また少し涙がこみ上げて来ましたが、一人で流したそれとは違い暖かい涙でした。

どのくらいの時間そうしていたでしょうか、とても長かった気もするし短い時間だった気もします。唯先輩がそっと身を離し、そのままおたがい言葉も無く見つめ合っていました。が、本当に言葉が出なかったのは私だけだった様です。

「大人のキスです!」

先輩はドヤ顔でそう言い放ちました。しかも、お得意のピースサイン付きです。も〜少しはムードってものを大切にして貰いたいものです。

「そんな格好よく決めたつもりでも、胸丸出しじゃしまらないですよ」

「いや〜ん、あずにゃんのいけずぅぅ〜」

そんな事を言いながら先輩は上着の裾を直していきました。その様子を見ていて、私にも自然と笑顔が浮かびます。この人の前に居ると、なんだか悩んでいたのがバカらしくなってきます。

「唯さん」

そう言うと、今度はわたしから先輩を抱きしめました。

「お!おおぅ!なんだどうした!お〜〜〜!」

唯さんはなんだかとても驚いています。そういえば私から抱きしめたのは初めてかも。

「あ、あと唯さんって」

「だ、だめですか?」

「ううん、とっても嬉しい」

「唯さん、ありがとうございます。唯さん。私も唯さんのこと、いっぱい、いっぱ〜い大好きです!」

「なんだかこそばゆいよ〜」

その後の言葉を私は飲み込みました、いつかちゃんと言おうと思いつつ。そして代わ

りに別の言葉を口にしました。
「そういえば、ブラジャーしてないんですね、唯さんは寝るときはしない派なんですか」
「え？その話？　へへへ、最近ちょっときつくって夜は外しているんだよね」
「新しいのくらい買ってくださいよ。就寝時用の製品もありますよ」
「あずにゃん、今度付き合ってよ～」
「え？　い、いいですよ……」
「じゃあ、あずにゃんのは私が可愛いいの選んであげるね」
「私のも買うんですか！」
「だって、あずにゃんが可愛いのしてるの見たいよ」
「見せてあげません！」
「ええ～あずにゃんのいけずぅ～」
　唇を尖らせてイヤンイヤンとしてる唯さんを見ていたら、私は思わず吹き出してしまいました。そんな私を見て、唯さんも笑ってくれました。ひとしきり二人して笑ったあと、お互いを見つめ合った少しの間ができました。唯さんを見ているとハートがトクントクンと鼓動を打つのが感じられ、私はそっと瞳を閉じました。唯さんはそんな私に優しくキスをしてそのままぎゅーっと抱きしめてくれました。幸福感がこみ上げてきて私も唯さんを負けじとぎゅーーっと抱きしめました。

　やがてそっと唇を離した唯さんの頬は軽く上気していました。恐らくは私も同じような状態でしょう。唯さんは軽くニコっと笑うと私の上着に手を掛けながらこう言いました。
「さぁ、あずにゃん上を脱いで。さっきのお返ししてあげる」
「え？」
「さっき、痛かったんだよ。ちょこっとあずにゃんにも味わってもらわないとね」
「うっ！　し、仕方ないですね」
　まさか、唯さんに仕返しされるとは思ってなかったですが、これも自業自得ってやつです。仕方なく私はパジャマの上着を脱ぎ、ブラジャーも外しました。改めてこうして目の前で脱ぐとなると、とても恥ずかしいです。恐らく私の顔はもう真っ赤になっていたでしょう。
「どうぞ……」
「おお、これがあずにゃんぱい」
「変な言い方しないでください！恥ずかしいんですから！」
「ごめん、ごめん、じゃ行くよ」
　私は反射的に目を閉じて、唯先輩の仕返しに備えましたが、予想していた荒っぽい胸の扱いはやってこなく、全く予想してなかった首筋に唇をつけられた感覚に驚いてしまいました。そして唯さんはそのまま舌をツツツっと鎖骨の方までユックリと滑らせていきました。思ってもいなかった部分の攻めに私は思わず声が出そうになってしまいましたがなんとか我慢しました。舌が私の上を滑るとともに、唯さんのかすかに漏れる息も私の肌をくすぐり、それがなんだか私を切ない気分にさせます。唯さんの舌はそのまま胸の真ん中をなぞりながら下に降りていき、なだらかな私の右の乳房の周囲を丸くなぞる様に進んだかと思うと、途中からその中央を目指して登り始めました。私はその予想がつかない動きにただ翻弄され、胸をドキドキさせながら見ているしかありませんでした。そして、その舌がついにピンクの頂に届きそうになった時に今度はその周辺を輪を描くようにぐるりと一周し、次の瞬間唯さんは頂きごとパクリと赤ちゃんの様にしゃぶりつき、口の中でそれをコロコロと転がす様に舌で弄び始めました。
「あっあん！唯さんいったいどこでそんな事覚えたんですか」
「んんんーん、んんんんん」
「それじゃ分からないです。ちょっと口を離してください」
「ぷはぁ！律ちゃんに借りた本で知りました！わたしの超絶テクはどう？子猫ちゃん」
「超絶テクって。でも、不覚にもちょっと感じました……」
　律先輩はいったいどんな本を唯さんに読ませたのでしょうか。今度、私も見せて貰おうかな……
「わ、わたしも唯さんのおっぱいを、いいでしょうか」
「どうぞ、どうぞ、こんなものでよけければあずにゃんなら大歓迎だよ」
　唯さんは、顔をだらしない笑顔に崩しながら胸をはだけて、むにゅっと両手で挟んで差し出してきました。そのむりゅっとした感じがとても柔らかそうで、私は思わず生唾を飲み込みそうになってしまいました。
「じゃ、じゃあ失礼します。あっそれと……さっきは乱暴にしてしまってすみませんでした」
「もう、いいよ～それは。今度は優しくね」
　さっきの事もあったので、私は壊れ物にでも触るようにゆっくり唯さんに乳房に手を伸ばします。それは私が以前、そう1年の合宿のときにお風呂場で見たときよりも確実

に大きくなっていました。形も丸く整っており、美乳と呼んでなんら差支えのない綺麗な膨らみでした。私は両手でその2つの膨らみをそっと包むように触り、あまり力を入れすぎないように気を使いながら円を描く様に揉み解きました。やはりしっとりしながらもスベスベの肌とお餅の様な柔らかさには感動さえ覚えます。

「唯さん、やっぱりだいぶ大きくなりましたよね」

「そうかなぁ、ちょっとは成長したと思うけど憂の方が大きいから自分のはあんまり自覚ないなぁ」

「憂の？確かに・・・大きいかも」

「そうなんだよ～一緒にお風呂とか入るとちょっと気になってさぁ、時々比べっことかしてるよ」

「え！一緒にですか！憂～！」

「うちのお風呂、一緒に入るには少し狭いけど、楽しいよ」

「こ、今度私とも一緒に入ってください！」

「そうだね、このホテルのユニットバスじゃ幾らなんでも狭いし、今度温泉でも行こうか」

「行きましょう、是非！」

こんな会話をしている間も私の手は唯さんの豊満な双丘から離す事ができず揉み続けていました。すると、唯さんも感じてくれているのか、少し陥没気味だった乳首も起き上がってきました。私はそれがなんだか嬉しくって手を伸ばし、手のひらでコロコロと転がしてしまいました。

「あずにゃん、それイイよ。私もあずにゃんにしてあげるね」

唯さんも私の乳房に手をあて丸く転がし始め、私たちはしばらく向かい合ったまま両手でお互いの乳房を弄っていました。それは客観的に見るとちょっと笑える光景だったかもしれませんが、その時の私たちは真剣にお互いを喜ばせてあげたいと思っていたので、そんな事は気になりませんでした。

「あずにゃんのおっぱい、ちっちゃくって可愛いね」

「そんな事言わないでください。少しは気にしてるんですから」

「でも、あずにゃんらしくって私は好きだなぁ」

唯さんは上気した顔でニッコリと笑いながらそう言いました。もし他の人に言われたら、私らしいってなんですか！って噛み付いたかもしれません、ですがなぜでしょう唯さんにそうやって言われると嬉しい気がします。これが好きって事なんでしょうか。

「あ、ありがとうございます。唯さん、あのう、そのう、ですね」

「ん？なあに？」

「あのですね、舐めさせてもらって、いいですか……」

「なんか、そう改まって言われるとちょっと恥ずかしいね。でも、いいよ～」

「じゃあ、ちょっと失礼します」

私は唯さんの固くなった蕾をおずおずと口に含み、舌でペロペロと舐め始めました。極限まで近づいて嗅ぐ唯さんの臭いはなんだか懐かしく、すごく落ち着く気がしました。なにかこう、遠い昔に母に抱かれていた時の記憶でも刺激するのでしょうか。そんな懐かしさもあって私は暫く一心不乱に唯さんの胸に吸い付いていました。

「あずにゃん、そうやっていると本当に子猫ちゃんみたい」

唯さんはそう言いながら、私の解いた髪を撫でててくれてます。それもとっても気持ちが良くって、本当のネコみたいにゴロゴロと喉を鳴らしたい気分になってしまいました。痛いくらいドキドキしていた私の心臓も少しは落ち着いてくれたみたいです。そう落ち着いて、ようやく私は唯さんの胸から口を離しましたが、そんなに夢中になって吸い付いていた自分が恥ずかしくって、唯さんとすぐに目を合わせられませんでした。

「あずにゃん、顔上げて」

「はい」

「あずにゃん、好きだよ」

「私もです。唯さん」

そして、私たちは再度濃厚なキスを交わしました。お互いがお互いを求めている、その喜びを溢れさせながら交わすそれは何と甘美な一時だったでしょうか。やがて、唯さんが手を下の方に伸ばしたので、わたしはそっとその手を止めました。

「私も唯さんにしてあげたいです」

唯さんはちょっとキョトンとした顔をしてからニッコリと笑いました。

「そうだね。お互いちょっと準備しようか」

そう言うと唯さんは纏っていた残りの衣類をパパパっと脱ぎ始めました。なんとも思いっきりがいいなぁと思いつつ、私も自分の手を動かしましたが、元々私の方はほとんど脱げかかった状態でしたので、終わったのは二人とも同じくらいで、二人してベッドの上で立ったまま向き合う事になりました。

「えへへ、お風呂場でもないのに、こうして二人して生まれたままの姿ってちょっと変な

気もするね」
「あんまり言わないでください。意識すると余計恥ずかしいです」
「でも、その下ろした髪もボリュームがあって、あずにゃんの細い体と対照的で魅力的だね」
「そ、そうですか、じゃあ普段からこうしちゃおうかな」
「でも、普段のツーテールもあずにゃんがしていると天使の羽みたいで激似合ってるんだよねぇ」
「どっちなんですか」
「どっちも魅力的で決められないよ〜」
　と、言って唯さんは私を抱きしめました。唯さんにはいつも抱きしめられていますが、こうやって一糸まとわぬ姿で抱きしめられると体温を直に感じてドッキリしてしまいます。
「あずにゃん、さっきは本当にごめんね。私、今まで自分の気持ちに自信が持てなかったんだ。あずにゃんを好きって思う気持ちが後輩に対する想いなのか、一人の女の子として好きなのか」
「それは、私も同じです。私もさっきようやく気がついたんです。気がついたら胸が苦しくなっちゃって、あんなことに。私こそ、すみませんでした」
「でも、そのおかげで私も自分の気持ちに自信が持てたよ。あのとき、あずにゃんが泣いているのが本当に切なくって、なんで私はもっと早くこの気持を受け止めてあげられなかったんだろうって」
「そんな言い方しないでください。私の方こそ受け止めてくれて、本当に救われました。こうして抱きしめ合えるなんて素敵すぎます」
「私もとっても、とっ〜ても嬉しいよあずにゃん」
　と、言いつつ唯さんは私をひょいっと持ち上げ、つかの間お姫様抱っこの体制になりました。そのまま私をそっとベットの上に降ろし、自分もその上から覆いかぶさりました。そして、再びキスを交わしながら私たちはお互いの体を弄りあいました。それはお互いの体が溶け合って一つになってしまったしまったような甘美なひと時でした。やがて、唯さんの手が私の女の子自身に伸びました。私も唯さんが触りやすい様に少し足を開きました。それまでにも増して鼓動が早まって来るのを感じます。ところが、唯さんの手は私のそこを上下に行ったり来たりするだけで何もしてくれませんでした。
「あれ、あれれ、ううんと、あれ〜？」
「どうしたんですか、唯さん」
「なんと言っていいのかそのう、自分でする場合と勝手が違って、人にしてあげるって難しいね。まいったなこりゃ」
「ああ、なるほど」
「そうなんだよ〜、う〜んやっぱり最初は見ながらじゃないと、どこがどこだか分からないや」
　唯さんはそう言うと、一旦立ち上がり私に背を向けたかと思うと、私を跨ぎそのまま四つん這いになって私のあそこを覗き込みました。当然唯さんの女の子自身は私の眼前に大胆に広げられています。私は慌てて足を閉じながら唯さんに抗議しました。
「ちょ、ちょっと唯さん、そんなしげしげと見つめられたら恥ずかし過ぎて私死んでしまいます！それにこの大股に開け広げた格好！うら若き乙女として如何なものかと思いますが！」
「私はあずにゃんなら見られて恥ずかしくないよ。好きだし」
「私も唯さんの事は好きですが、恥ずかしいものは恥ずかしいです」
「まぁまぁ。そんな事言わずにちょっとだけ見せてよ、あずにゃ〜ん」
「だめなものはだめです」
「む〜、いいもん。あずにゃんペロペロしちゃうから」
「え？ペロペロって？」
　私が確認するよりも早く唯さんは私の閉じた股間に顔を近づけて舌でそこを舐め始めました。
「や、そんなとこ舐めたら汚いです」
「あずにゃんペロペロ、あずにゃんに汚いとこなんてないよ。ペロペロ。」
　唯さんはわざとペロペロと声を上げながら私のそこを舐め続けて、時には閉じた両足の間まで舌を差し込んできました。　また、時には股間だけでなく内腿の辺りも丹念に舐められてしまい、それがくつぐったいやら、気持ちいいやらで、少しずつ閉じてる足に力が入らなくなっているのが、自分でも分かります。このままでは負けてしまいそうなので、私も反撃に出る事にしました。　まぁ、幸いにというか、弄ってみろと言わんばかりに唯さんのあそこは私の目の前に広げられていますし。
「唯さん、失礼します」
　と、一応断ってから私は唯さんのそこに顔を近づけてペロリと一舐めしてみました。確かにこれが唯さんのだと思うと汚いなんて思いませんでした。甘酸っぱいヨーグルトの

穏やかな香りも気持ちよく、綺麗なピンク色のそこはむしろ可愛いような気さえします。好きって感情は不思議です。舐めた瞬間、唯さんは小さく「あん」と声を出した気がしましたが、私に対するペロペロは止めずに続けています。私も負けずに小さな突起を中心に丁寧に優しく舐め続けました。すると、そこは小さくも硬くピンとなり唯さんが感じているのが分かり、私も嬉しくなりました。そこはちょっとしょっぱく、でも不思議と甘い気もするのは唯さんの良い香りのせいでしょうか。その香りに私は魅せられた様に夢中になって舐めていました。

「ん、くふ……あっ、あずにゃんもやるねぇ。ならばこっちも」

唯さんはそういうと今迄腕で支えていた上半身を私の下半身に乗せて、舌だけでなく手も使って私を責めはじめました。指を割れ目沿いに入れて来て私を刺激します。そこはもうかなり濡れてしまっていますので、私の意志に反してスムーズに指を受け入れてしまいました。唯さんは筋にそって指をこすり上げてきます。それは今までのソフトなタッチから一転して激しく、嫌が応にも私のなかの官能を刺激しました。

「ゆ、ゆいさん……やめて…ください。わ、わたし、もうもう。ふっふうううぅぅ！」

「でもまだ、開かないね。それならこうだ！」

唯さんは更にもう一方の手を私の体の下に差し入れお尻の方からも攻め始めました。これには、私もぞぞぞわっと、今まで感じた事のない嫌な感じが駆け上がってきて、思わず叫びました。

「唯さん、そそれは反則です！わ、分かりました私の負けです。降参です」

そこまでされたところで、私は諦めて白旗をあげ、仕方なく足を開きました。開かれた股間を唯さんは覗き込み「おおお」とか「ふんふん」とか「やっぱ私のとは少し違うなぁ」とか言いながら見ています。私は恥ずかしさで今まで以上に顔が熱くなるのを感じていました。

「もう、お嫁にいけない……」

「私が貰ってあげるよ～」

「日本では同性婚は認められてません」

「そうなの？でもきっとどうにかなるよ」

「よく根拠もなくそういう事を言いますね」

「私たちならなんとかなるって」

唯さんにそう言われると、根拠なんか無いって分かっていても、なんとかなってしまう気もするのが不思議です。

「よし、もう分かった！ふんす！」

私のあそこを、しげしげと見ていた唯さんは、そう言って立ち上がって向き直り、頭をこちらに向けて私の横に寝転がりました。

「あれ、あのままするんじゃないんですね」

「だって、やっぱり最後はあずにゃんの顔を見ながらしたいじゃん」

今まで私のあそこを覗きこんでいたとは思えない様な邪気の無い笑顔で唯さんは言います。この笑顔は反則です。唯さんはずるいです。そんな顔してそんな事を言われたら私キュンキュンしちゃって大概の事は許せる様な気になってしまうじゃないですか。

「そうですか。私も唯さんの顔が見れてこちらの方がその、う、嬉しいです」

「えへへ、あずにゃん可愛い」

あっずにゃーんと言いながら唯さんは私の頭を抱え込みよしよしとしてくれます。私と云えばこんな状態になりながらも唯さんの裸の胸が気になって、さらにドキドキとしてしまいました。

「さぁ、あずにゃん一緒に行こう」

「ええ、一緒に」

もう何度目でしょうか、再び私たちは濃厚なキスを交わしました。キスの度に私はぽわわわんとなってしまい、その気持ち良さにキス中毒になってしまいそうな気さえします。

「唯さん、好きです。大好きです」

「あずにゃん、私も大大大好きだよ」

私たちはキスをしながらも体をピッタリとくっつけ、お互いの体をまさぐり合い始めました。唯さんの柔らかい乳房が私の胸の上でむにゅっと広がり、乳首同士が擦れ、それだけで声を出してしまいそうな程感じてしまい、下の方も既にびちゃびちゃな位に濡れてしまっているのが、自分でも分かります。そして、そこに唯さんの指がついに伸びてきました。

「あずにゃん、もうこんなに濡れちゃってるね」

「言わないでください。恥ずかしいです」

「でも、嬉しい。私との事でこんなに感じてくれるなんて。私もさっきからあずにゃんに触る度にキュンキュンってなっちゃって、凄いことになっちゃいるよ～。ほら、あずにゃんも触ってみて」

「は、はい」

言われるままに、唯さんの女の子自身に触れてみると、私と同じように止めどもなく蜜が溢れてしまっている状態でした。私が軽く唯さんの突起に触れただけでも体がビクンとなり、感じ過ぎてしまっている様子が伝わってきます。そんな唯さんが可愛くて、もっと私で感じて欲しくて、私は指でそこをなぞったり、軽く摘んだり、擦ったりして愛撫を続けました。唯さんの方も私に同じ部分を丁寧に可愛がってくれています。それは自分自身でするのは比べ物にならない程で、悦びが背筋を駆け抜け私の脳髄を焼き尽くし、もう他の事は何も考えられなくなる位でした。二人とも徐々に息を荒くし、部屋は甘くしかし激しい吐息で満ちていました。

「はぁはぁ、はぁはぁ、んん！唯さん、唯さん」

「あ、あずにゃん」

「あっ、あん。あああぁ私、私すごっく感じちゃって怖いくらいです」

「はぁはぁあっああん。私もだよ。だけど、本番はこれから……だよ。んん！行くよ！」

そう言うと、唯さんの指はついに私の中に入ってきました。細い指が入ってだけの筈ですが、私の体には文字通り貫かれた様な衝撃が走りました。それは痛みばかりではありませんでしたが、やはり自分の指を入れるのとは少し違う様です。

「ん、くふぅ！あっあっあっ！ぐぐ！はぁはぁ……」

「あずにゃん、痛い？大丈夫？」

「だ、大丈夫です。続けてください」

あまり慣れていないところに異物が入って来たせいか、最初こそ痛みと違和感を感じたものの、流石に指一本だけなので、それには直ぐに慣れました。それに恥ずかしい事にとても濡れていましたし……唯さんは私の反応を見ながら最初はゆっくりと指の抽送を始めました。唯さんの指が動く度に微かながらクチュクチュと恥ずかしい音がします。唯さんの指が今私の中に入っている、そう考えただけで胸が熱くなるものがあります。ゆっくりと動いているだけなのに、その度に電撃が走るような感覚が湧いてきて、自分でするのとは全く感覚の質が違う体験でした。

「あずにゃん、あずにゃんも私の中に来て、あずにゃんのが欲しいよ」

そう私に言う唯さんの表情はとても切なそうで、少し潤んだ目がとても色っぽくて私は思わずドキッとしてしまました。

「はぁ、はぁ。唯さん、いきますよ」

「うん、来て。やさしくしてね」

「もちろん……です」

私も唯さんの下半身に手を伸ばし、あまり濃くはない茂みを抜け、貝の様に閉じられた部分をそっと開き、人差し指をゆっくりと差し入れました。そこはとてもキツく、そしてネットリと濡れており、なによりも中が火照ってとても熱くなっていました。

「んんんん、はぁ～ふぅ～」

私が指を入れると唯さんはちょっと痛そうにし、少し長めの呼吸をしました。

「大丈夫ですか？」

「うん、私あんまり入れたりしないから、最初はやっぱりちょっと違和感あるね。でも大丈夫だよ」

さっき目の前で広げたられた時も思ったのですが、唯さんのは私のとは微妙に位置や形が違う様です。入れた指に伝わってくる感じも違っていて、入り口の部分はよりキツイですが、中はそうでもありません。しかし、ちょっとザラっとした感じがします。私は爪で中を傷つけたりしないようにゆっくりと動かし始めました。もっとも私も唯さんも普段楽器を使っている関係で爪は常に短めにしてますので、それほど神経質になる必要もありませんが。

「はぁ、はぁ！あっあずにゃん、凄い！凄いねこれ。異物感もあるけど、それ以上にゾクゾクってした感覚が登ってくるよ！」

「唯さん、唯さんの指も凄いです。私もう何も考えられなくなってしまいそうです。くぅっ」

唯さんの頬は綺麗なピンクに染まり、額には軽く汗が浮かんで光っています。潤んだ瞳とバラ色の唇、汗に軽く濡れてしっとりとした髪も少し乱れて、そこから覗き見えるうなじがとっても色っぽいです。私はそんな唯さんが私で感じてくれるのが嬉しくて、私だけを見てくれているのが嬉しくて、いくらかでもそれを返そうと、優しく丁寧に指を動かし続けました。そして、私の中の唯さんも指も同じように優しく動くのが感じられ、そこからは奔流のような快感が私の中を駆け登ってきています。

「ゆ、唯さん！あっ、あっ！」

「あずにゃん！んんんん」

私が空いている方の手を唯さんの方に伸ばすと、唯さんはその手をガッチリと握り返してくれました。そこからは不思議な一体感が溢れてきて、暖かな気持ちが今まで以上に心を満たしました。私たちはそのまま胸をより密着させどちらからともなく、お互いの乳首を擦り付けあいました。二人とも軽く汗ばんでいましたので適度に滑り、プルン、

プルンとピンクの突起同士が弾けあいます。その気持ちよさも私をより昂ぶらせましたが、なにより硬くなった私のそこが唯さんの乳房に沈んでいく様は何故かとても興奮してしまいました。唯さんはというと今度は私の首筋にキスの雨を降らせ始めました。

「あん、唯さんそんなに強く吸っちゃ跡が残っちゃいます。ダメ、ダメです」

「でも、こんなに可愛いあずにゃん見ていたら、私我慢できないよ。はぁはぁ」

「もう一度、もう一度キスがしたいです」

「はぁはぁ、分かったよあずにゃん」

お互い既になかり興奮していたせいか、今度のキスは今までのものよりかなり激しく、お互い顔を左右に振りより深く相手を求め合いました。唇はひしゃげ、舌は激しく絡みぴちゃ、にちゃ、じゅぷと唾液が絡みあう音が部屋に響きます。それは昂揚感をいっそう高めた様です。

昂ぶってきた私たちは、相手の指の動きに合わせて腰がぎこちないながらも自然と動き始めました。静かだった部屋にギシギシとベットが軋む音が響き、そこに甘い嗚咽も被さり、クチュクチュというエッチな音も少しだけ聞こえます。私たちはなるべく声を出さないようにしていましたが、そろそろそれも限界です。呼吸は次第に荒くなり、思わず漏れる嗚咽も次第に大きくなり始めています。

「はぁあんあぁあん、んん、くふぅ〜、唯さん、唯さん、私、もう、もうダメです」

「んんん、あずにゃん、あずにゃん、はぁはぁ、私ももうちょっとで大きなのが来そう。一緒にいきたいよ」

「私も唯さんと一緒にいきたいです。んんんんんん」

私たちはお互いを求め、先ほど握り合った手と手により一層の力が入ります。普段だったら痛く感じたかもしれませんが、今の私達はそこに一体感を見いだし歓びに感じてしまう程でした。二人の下半身は興奮の極限に達し、あふれ出るものはシーツを濡らし始めていましたが、その時の私たちにそんな事を気にする余裕はなく、ただお互いを求めて合い続けました。まるでシンクロしている様に二人の指の動きが同時に激しさを増していきお互いを頂点に導かんとしていました。

「あん、あん、あふっ、あずにゃん、わたし、わたしもう来ちゃう、来ちゃいそうだよ〜」

「ゆいさん、ゆいさん、わたしも、わたしもです。もう、もうんんん溶けてしまいそうです」

私たちは二人溶け合わさらんばかりに体をぴったりと押し付け合い、体全体でお互いを感じあい、その時を迎えました。

「あずにゃん、あずにゃん、んん、あっあっあっあああ〜んんんんんん」

「ゆいさん、ゆいさん、おふっ、んん、あっあああ、ふぁあああああああ〜〜ん」

その瞬間、一人でしたときとか比較にならない様な大きな大きいな波が私を襲い、全てを白く焼き尽くしていきました。体はビクンビンクと大きく痙攣すると、意思に反して力が抜けてしまい、唯さんと体も離れベッドの上に仰向けに転がってしまいました。唯さんも似たような状態だった様ですが、それでも二人とも繋いだ手だけは離しませんでした。

体は全ての力が抜けてしまった様な気だるさがありましたが、大きな多幸感に包まれとてつもなく幸せな気分でした。十分くらいは二人で手を繋いだまま半ば放心状態でぽーーっとしていたのではないでしょうか。やがて、そのままの姿勢で唯さんが喋り始めました。

「あずにゃん、起きてる？」

「はい、起きてます」

「凄かったね」

「はい、凄かったです。そして、凄く嬉しかったです」

「わたしも、とっても嬉しい。でも、最後の方思いっきり声でちゃったね。隣に聞こえちゃったかな」

私は少し身をよじり、近くの時計を確認してから答えました。

「もう、4時過ぎてますし流石に皆さん寝ていらっしゃるかと」

「そうだね」

そう言いながら唯さんは身を起こしたので、私も起きてみましたが改めて見るとシーツもかなり濡れてしまった部分などあります。

「私たち汗やらなんやらびちょびちょで酷い有様ですね。シーツも濡れちゃってるし」

「ベットはちょっと狭いけど、私の方ので一緒に寝ようよ。こっちは拭いておけば朝までには大丈夫じゃないかな。それと、二人でシャワーの浴びせっこしようよ」

「え、シャワーを一緒にですか……分かりましたご一緒に入りましょう」

「えへへへ、あずにゃんとシャワー♪シャワー♪」

私たちはベッドを少し清掃したりした後、シャワーでお互いを綺麗にし、水滴もお互いに拭き取り合いました。その間、唯さんが「なんか、新婚さんみたいだね」なんて言

うもんですから私の顔はまた真っ赤になっていました。

「私ね、今日のライブは世界で一番幸せな曲が歌える様な気がするよ」

「じゃあ、私は一番幸せなメロディを弾けますね」

私達は二人で唯さんの。ベッドの上です。二人で寝るには少し狭いので必然的にぴったりと寄り添った状態です。

「これぞ、怪我の功名ってやつだね」

「間違ってはいませんが、どちらかというと災い転じて福となすじゃないでしょうか」

「結果オーライだね」

「ですね」

暫くはそんな他愛の無い話をしていましたが、夜が明けてきた頃には二人とも抱き合ったまま寝てしまっていました。

「ふわ〜ぁ」

エレベータの中でついつい私は大きな欠伸をしてしまいました。

「なんだ梓、寝不足か」

横にいらっしゃった律先輩が心配そうに聞いてきましたが

「ふわ〜わ〜ぁ」

その横で唯さんが、さらに大きなあくびをしたので、あきれた様な口調になり

「なんだ、唯もかよ」

「だって、あずにゃんが寝かしてくれなかったんだもん」

なんて言うもんですから、私はビックリして

「二人で、ついついこの2年の思い出話に夢中になっちゃってですね！」

とお二人の会話に割り込んでしまいました。唯さんには一応昨晩の事は内緒にっておお願いはしましたが、ついうっかり口にしちゃうんじゃないかとハラハラです。

「おいおい、二人ともそんな調子で今日のライブ大丈夫かよ」

「任せておいて、あずにゃん分もばっちり補給したから、気力バリバリだよ！フンス！」

「あーはいはい。じゃあ、今日は任せたからな」

その頃にはエレベーターもロビーのフロアに到着し扉が開きましたので、律先輩達は先に出て行きました。

「唯先輩、私たちも行きましょう」

そう言って私は唯さんに手を差し出しました。もちろん唯さんはその手を握り返してくれます。私たちはそのままエレベーターを出ました。ロビーではムギ先輩が何か大きな物を持っています。あれはひょっとしてキーボードでしょうか。

「おお、あれはムギちゃんの！あずにゃん、さぁ行こ！」

「はい、唯先輩」

私たちは手を繋いだまま他の先輩の元に走り始めました。唯さんの手は私より一回り大きく、とっても柔らかいです。その心地良い温もりを感じながら、私はこの手をいつまでも離したくないなと気持ちを新たにして走り始めました。

KISS KISS KISS
K.S-K

ねーねー

あずにゃん
あずにゃん

どうしました
唯先輩
わからない問題でも
ありましたか？

ちゅ♡

あずにゃん

チュウしてもいい？

ぇ!?

唐突になんですか！
べ、勉強は
おわったんですか？

あずにゃん分が
不足しちゃって

勉強が
はかどらないんだよー

にゃ!?

あずにゃんと
ちゅーしたいー
ちゅーしたい

仕方がないですね
唯先輩のために
少し休憩にしましょう

ぎゅっ

その間に
あずにゃん分でも
キスでも
好きなだけしてください

ドキ
ドキ
ドキ
ドキ
ドキ

唯先輩と
ちゅう…♡

あずにゃん
だいすきー♪

ぎゅ!

ちゅ♡

んっ

ちゅ…

ちゅ…

唯先輩ってば
強引すぎです…
こ、これで少しは
満足しましたか？

は

はぁ

ぷはっ

ちゅ

ちゅ

だって

って
唯センパイ…ッ！
な、なにを
してるんですか

ちゅ

あずにゃんが好きなだけキスしていいって

たしかに言いましたけど身体にするなんて一言も…

どこにしたってキスはキスだよ～

唯先輩ダメッ！そこはだめっです！

っ…あっ

だからってそんなとこっ…！あっ…ん

ドキ
ドキ
あずにゃん
下着
脱がせちゃうね
あっ…
ちょ♡
えぇ…ッ！
今はちょっと…
スルッ
大丈夫、だいじょうぶ
やさしくするから～♪
スカート持っててね
やさしくって
何する気ですか…
ぱぁ
ぱぁ
あ…！
あずにゃんキスされて
濡れちゃったの！？

これは違うんです
唯先輩が
へんなとこに
キスするから
だからぁ…
もじ
もじ
も〜〜〜
ばかぁ…
あずにゃん
可愛すぎ
あずにゃん
ゴメンね私ちょっと
我慢できないかも…
!!
ぷちっ
ぷちっ

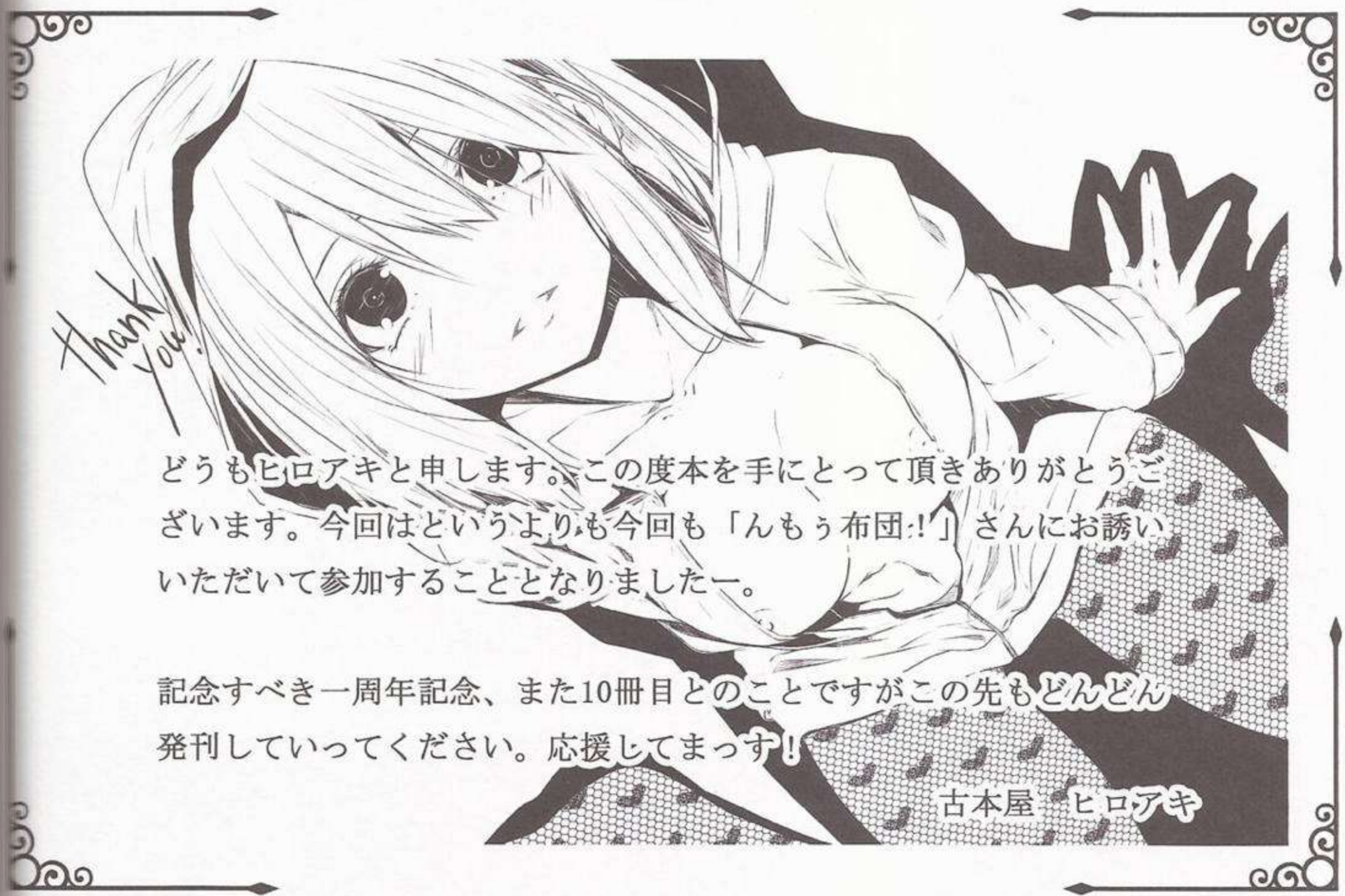
あむ…
あっ♡
舌いれちゃいやですっ！
ちょっ…！唯先輩それキスじゃない…ッ！
でぃーぷきすだもん♪
キレー♡
やぁ 拡げないでください！
はぁ♡
はぁ♡

ぱ〜〜
唯先輩ッ
もうそれ以上は
私…もうッ
……きちゃうので
止まって下さい！
ぱ〜〜…
ぱ〜〜…本当にもう
あっ…んッ!?
ちゅ
ちゅ
ちゅ
ぴくっ
ゆちゅ
あずにゃん可愛い
にゃあぁぁ
ぴくぴくっ
ぴくっ

あずにゃんもっと
いろんなとこキスさせて
むちゅちゅー
…にゃあぁ
さーて
あずにゃん分も
補給したしお勉強
頑張っちゃうぞー
あずにゃん分
フニャ!
!!
!?
ユイセンパイ♥
唯先輩だけ
満足して終わりなんて
させません
次は私の番です!
えっでも
あずにゃん
勉強が…
あっ♥
そんなの
関係ねーです
唯先輩の恥ずかしいところに
キスマークつけてやるデス!
あずにゃんが
エロにゃんに!?
chu
to be continued?

YUi ♡ AZU
Very LOVE

あとがき



どうもヒロアキと申します。この度本を手にとって頂きありがとうございます。今回はというよりも今回も「んもぅ布団!!」さんにお誘いいただいて参加することとなりましたー。

記念すべき一周年記念、また10冊目とのことですがこの先もどんどん発刊していってください。応援してまっす！

古本屋 ヒロアキ

アローン！

んもぅ布団！さんが頒布してくださった『スパロディおん！』という個人誌の中の『びびおん！』の番外編を描いてしまいました。

『びびおん！』は『ビビッドレッド・オペレーション』というアニメのパロディで、ムギちゃんが博士（見た目カワウソ）のポジションにぴったりと収まってしまったせいで、軽音部の中で1人だけ変身できないという残念なことに。

それはそれで美味しいんですが、きっちりフォローしてあげたいと思い今回の番外編になりました。

読んでくださってありがとうございます！

しょうのすけ

お手に取ってくださり
誠にありがとうございます。
ckstと申します。

サークル活動を始めてから
1年目の記念すべき一冊と
なりました。

お題、難しかったです！

これからもどうぞよろしく
お願いいたします。

■ckst（しーけー）「んもぅ布団!」
pixiv ID: 202477
Twitter ID: ckst

あとがき

I've a sweet tooth♡

おくづけ

ロンドン旅行から帰って暫くしたある日、登校日だったムギ先輩に私は引き止められました。
「梓ちゃん、ちょっとちょっと」
「ハイ、なんですかムギ先輩」
「これ、受け取って。この間の御礼とお祝いよ」
「お礼とか、お祝いってなんでしょうか？」
「この間とっても良いものを聞かせていただいたお礼よ」
「この間ですか。すみません、ますますもって分からないのですが……」
「ロンドン旅行の最終日の朝、二人共とってもいい声だったわ」
そう言われた瞬間、きっと私は血の気の引いた顔をしていたに違いありません。
「あらあらあら、大丈夫。他の人には言ったりしないから。唯ちゃんといつまでもお幸せにね」
そう言うとムギ先輩は自分たちの教室に戻っていってしまいました。
私は言葉も無くただ立ちつくすだけでした。
帰ってから渡されたプレゼントを開けて見ると、すっごく高級そうなネグリジェでした。
しかも、スケスケなやつが、二人分。
ムギ先輩はこれを私達二人に着ろというのでしょうか……
それにしても恐るべきムギ先輩の百合百合レーダーです。

TwitterID : beltree
BEL-TREE

けいおん！ファンブック　I've a sweet tooth

発行日：2013/08/10

発行元：んもぅ布団！

発行者：BEL-TREE

連絡先：beltree250@gmail.com

Blog：http://nmoufuton.blog.fc2.com/

印刷：(有) 金沢印刷

K-ON! Fanbook

Presented by んもう布団!

Summer 2013